暦の話

現在、旧暦と呼ばれているものは、天保暦の事をさします。
天保暦は、明治5年(1872年)旧暦12月2日まで使われていました。その翌日の明治6年(1873年)1月1日から、グレゴリオ暦(太陽暦）に改暦されました。改暦は、明治5年旧暦11月9日に布告、翌月に実施という急なものでした。これは、明治維新後、明治政府が月給制度にした官吏の給与を（旧暦のままでは明治6年は閏6月があるので）年13回支払うのを防ぐためだったといわれています。

今なお占いや伝統行事などでは需要があり、旧暦もしくは陰暦の俗称で用いられています。

閏月（うるうづき、じゅんげつ）とは、太陰太陽暦において、暦が実際の季節とずれるのを防ぐために挿入される月のことです。閏月の挿入の有無が、太陰暦と太陰太陽暦との違いです。

月の運行のみに基づいた太陰暦による日付は太陽の位置と無関係であるため、暦と四季の周期との間にずれが生じて農耕等に不便になります。そこで古代中国では、本来の季節を知る目安として、太陽の運行を元にした二十四節気が導入され、二十四節気による暦と月の運行による暦とのずれが1か月程度になったときに余分な1か月（閏月）を入れて調節するようになりました。

二十四節気

二十四節気（にじゅうしせっき）は、二十四気（にじゅうしき）ともいい、太陽太陰暦において月を決定し、季節とのずれを調整するための指標として使われます。

分割点には12の節気と12の中気が交互に配され、各月は月の節目となる朔日（1 日）を節気前後に置いて月中に中気を含むが、中気が含まれない月が現れた場合には閏月が設けられます。

二十四節気は当初、冬至を計算の起点にして、太陽年を24 等分した約 15 日ごとに設けられました。これを平気法または時間分割法と呼びます。しかし、地球の軌道は円ではなく楕円であるため、太陽の黄道上での運行速度は一定ではないため、中国では清朝の時憲暦から、日本では天保暦から、黄道を春分点を起点とする15度ずつの24分点に分け、太陽がこの点を通過する時を二十四節気とすることにしました。これを定気法または空間分割法と呼びます。

二十四節気の名称は、発明された当時の物がほぼそのまま使われており、当時の文明の中心であった黄河の中・下流域の気候を反映しています。日本よりも寒冷で大陸的な気候の地で生まれたものであるため、日本の気候とは一部ずれがあります。

二十四節気をもとに配置された月や四季は、日本の実際の四季が約 1ヶ月くらい早くなっているため、日本で独自に雑節が設けられたり、本朝七十二候が作られたりしています。

名称の由来を種類別に分けると以下のようになります。

天象と暦学上の季節区分・・	春分・夏至・秋分・冬至
暦学上の季節区分・・	立春・立夏・立秋・立冬
気　温　・・	小暑・大暑・処暑・小寒・大寒
気　象　・・	雨水・白露・寒露・霜降・小雪・大雪
物　候　・・	啓蟄・清明・小満
農　事　・・	穀雨・芒種

暦月と節月

太陰太陽暦における1ヶ月は月の運行に基づき朔日から晦日までとする区切り方であります。この月を暦月という。各暦月の名称は二十四節気を基準に定められます。
暦では

正月・2 月・3 月を春、
4 月・5 月・6 月を夏、
7 月・8 月・9 月を秋、
10 月・11 月・12 月を冬とする。

なお暦注において暦月による月の区切り方を月切りと呼びます。

太陽黄経（度数）が30の倍数であるもの（春分・穀雨など）を中（中気）、そうでないもの（清明・立夏など）を節（正節、節気）と表します。
節気から次の節気の前日までの間を1か月とする月の区切り方を節切り、その月を節月といいます。

日本では、占いや年中行事を記す暦注の中で節切りによるものがよく使われ、また季語の分類も主として節切りで行われています。

節月では、
正月節（立春）から2月節（啓蟄）までが正月、
2月節（啓蟄）から3月節（清明）までが2月、
3月節（清明）から4月節（立夏）までが3月
というようになり、
立春から立夏までが春、
立夏から立秋までが夏、
立秋から立冬までが秋、
立冬から立春までが冬、
というように定められています。
旧暦における月名は、その月が含む中気によって決まります。従って雨水が正月15日以前にきたとき、立春はその15日前なので、立春が前の年という奇妙な事が起こります。
「年のうちに春は来にけり、一年を去年とやいはむ、今年とやいはむ」---古今集より。

二十四節気一覧

月は節月、括弧内は太陽黄経と大体の日付。日付は年によって変動する。
春
一月：立春（315度、2月4日）- 雨水（330度、2月19日）
二月：啓蟄（345度、3月6日）- 春分（0度、3月21日）
三月：清明（15度、4月5日）- 穀雨（30度、4月20日）
夏
四月：立夏（45度、5月5日）- 小満（60度、5月21日）
五月：芒種（75度、6月6日）- 夏至（90度、6月21日）
六月：小暑（105度、7月7日）- 大暑（120度、7月23日）
秋
七月：立秋（135度、8月7日）- 処暑（150度、8月23日）
八月：白露（165度、9月8日）- 秋分（180度、9月23日）
九月：寒露（195度、10月8日）- 霜降（210度、10月23日）
冬
十月：立冬（225度、11月7日）- 小雪（240度、11月22日）
十一月：大雪（255度、12月7日）- 冬至（270度、12月22日）
十二月：小寒（285度、1月5日）- 大寒（300度、1月20日）

この各月の左側に書いてある方が「節（せつ)」、右側が「中（ちゅう)」であり、中

気を含まない月を閏月とします。

五節句／五節供

節句（せっく）は、伝統的な年中行事を行う季節の節目となる日のこと。節供（せっく）とも。特に中国大陸から伝わった暦の上の風習のものをいう。

古くは節日（せちにち）といい、節日には朝廷において節会と呼ばれる宴会が開かれたといいます。日本の生活に合わせてアレンジされていくつもの節日が伝わっていましたが、そのうちの5つを江戸時代に幕府が公的な行事・祝日として定めたのが節供である。

人日（じんじつ）：旧暦一月七日

人日は中国の占いの風習から来ている。正月一日から六日までは獣畜のことを占い、七日に人を占うところからこの名が付いた。この日の天候でその年の運勢を占い、もし晴れなら幸があり曇りなら災いがあるとされた。江戸時代に幕府の公式行事として将軍以下が七草粥を食べて祝ったために祝日となった。

上巳（じょうし）：旧暦三月三日

元は三月巳の日に行ったものが後に三月三日に固定された。古代中国ではこの日に川で身を清め不浄を払う習慣があった。平安時代に形代（かたしろ）と呼ばれる人形を作りこれに汚れを移して川に流して不浄を払った風習があり、現在も「流し雛」として各地に残る。江戸時代以降雛祭りとして庶民に広がったことから節句となった。

端午（たんご）：旧暦五月五日

元々は五月最初の牛の日を指す。古代中国ではこの日に野に出て薬草を摘んだり、ヨモギで人形を作り戸口に飾り魔除けにする、菖蒲湯を飲んで邪気を払うなどの風習があった。これが日本に伝わり菖蒲や蓬を軒につるす、柏餅を食べて祝うなどの習慣に変わった。古来日本は五月を悪月、物忌み月などと言い、田植えを始める前に早乙女が家に隠って身を清め、田植えの神を迎える風習があり、これが中国の風習と一緒になった。当初女性の節句であったが、武家社会により男子の節句に変わった。江戸時代には男子の居る家で鯉のぼりを建てる、鎧兜や人形を飾るなどの成長を祝う行事となった。

七夕（しきせき）：旧暦七月七日

七夕は幾つかの行事が複合して出来た習慣である。『その１』中国の牽牛星（彦星）と織女星（織り姫）の星祭り。『その２』女子が手芸で上手になることを織女星に願った中国の乞功奠（きこうでん）。　『その３』古来からの「棚機つ女（たなばつめ）」。これらの伝説が一つになり、江戸時代から現在の七夕伝説と行事の形態ができあがった。

重要（ちょうよう）：旧暦九月九日

重要は易で言う陽数の極みである「九」が重なる日で重九（ちょうく）とも言い、古来中国では大変めでたい日として邪気を払い長寿を願って菊の花を飾り、酒を酌み交わして祝った。平安時代に日本に伝わり、宮中儀礼として取り上げられた。江戸時代には最も公的な性質を持った行事となり、武家では菊の花を酒に浸してのみ、祝った。民間ではアワ御飯を食べる風習があった。

各月の別名

1 月 - 睦月（むつき）　2 月 - 如月 または 衣更着（きさらぎ）3 月 - 弥生（やよい）

4 月 - 卯月（うづき）5 月 - 皐月 または 早月（さつき）6 月 - 水無月（みなづき）

7 月 - 文月（ふみつき）8 月 - 葉月（はづき）9 月 - 長月（ながつき）

10 月 - 神無月（かんなづき）、出雲地方では神有月（かみありつき）

11 月 - 霜月（しもつき）12 月 - 師走（しわす）

本来は旧暦による月の別名であるため、そのまま新暦に適用すると季節感が合わなくなります。十二月の別名「師走」は、年末の慌ただしい様子を表す月名として、現在でもよく使われています。

川柳マガジンクラブ東京句会２００７年１１月句会

参考文献(サイト)

フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

http://ja.wikipedia.org/wiki/メインページ

こよみのページ

http://koyomi.vis.ne.jp/directjp.cgi?http://koyomi.vis.ne.jp/reki_doc/doc_0508.htm

暦とは

http://www.asahi-net.or.jp/~nm9m-hsy/koyomi/